

日付けの常縁が宗祇に宛てた書状中に

此程、当郡之山中に庵室を構候而、乍憚小倉山庄になぞらへ、

老之すさミ所とせはやの有増に候

(『大和村史』資料編)

としたためおり、小倉百人一首の選者かともいわれている宇都宮

頼綱が京都の小倉山麓に構えた山荘になぞらえて、常縁が郡上の山

中に庵室を営んだことが知られるのである。当遺跡の園池もこの時に築かれたのではないかと推定されるのである。

8 木簡の釈文・内容

(1) 「進上あんとう三郎」

142×20×3 032
（波多野寿勝）



卷頭言——木簡史の研究について——

関 晃

一九八二年出土の木簡

概要 平城宮・京跡 平城京二条大路・左京二条二坊十二坪 白

毫寺遺跡 藤原宮跡 山田寺跡 阿部六ノ坪遺跡 長岡京跡(1)

長岡京跡(2) 長岡京跡(3) 長岡京跡(4) 仁和寺南院跡 大坂城跡

梶子遺跡 道場田遺跡 野畠遺跡 穴太遺跡 下野國府跡 下野

国府跡寄居地区遺跡 長原東遺跡 多賀城跡 払田柵跡 日野川

朝宮橋下流 桜町遺跡 出合遺跡 辻井遺跡 助三畑遺跡 肩脊

堀之内遺跡 草戸千軒町遺跡 田村遺跡 高畠廃寺 藤田遺跡

一九七七年以前出土の木簡(五)

藤原宮跡

字訓史資料としての平城宮木簡

——古事記の用字法との比較を方法として——

小林 芳規

鬼頭 清明

田中 琢

水藤 真

彙報

平城宮出土の衛士関係木簡について

木簡とコンピュータ

書評・『草戸千軒——木簡——』

頒価 三五〇〇円 一四〇〇円

木 簡 研 究 第五号

関 晃